

慈濟 227 ものがたり

TZU CHI ● ツーチャー



2015 ● 11

慈濟ものがたり

N
O
2
2
7

慈濟基金會

今月の表紙

「すごく痛いことは知っています。
でも絶対あきらめないで！」
慈濟病院の看護師邱心玲さんが八仙
樂園粉塵爆発事故の患者を励まし、
看護する。

(撮影・蕭耀華)



表見返し●

文・證嚴法師／訳・済運／撮影・李白士

清く澄んだ静寂な心

外から誘惑されれば
心は踊らされ

貪欲に執着して
悪業を造る結果となります

深く信ずる心があれば
志は堅いものになり

心身共に害されることなく
影響されることもありません

清く澄んだ静寂な心こそが
智慧なのです



目次

【社論】 無畏施の菩薩行	慈願／訳	4
-----------------	------	---

【台風十三号災害報道】 腰をかがめて泥を掃く 自然に屈服する	日本語組／訳	8
--------------------------------------	--------	---

【主題報道・台北の八仙樂園爆発】 □八仙樂園粉塵爆発事故後・勇敢な君たち □歩行練習と共に 始まる新たな人生 □最も美しい容姿を 正面から見て思考する	済運／訳 済運／訳 慈願／訳	18 32 48
--	----------------------	----------------

【證嚴法師のお諭し】 修行は深くして 善縁を結ぶように	慈願／訳	58
--------------------------------	------	----

【清貧から豊かさを得る】 心広ければ住まいも広い ❖広い住まいより広い心を	慈願／訳	70
---	------	----

【医者のお諭し】 知識を応用できるのはとてもよい	金華／訳	80
-----------------------------	------	----

【大地の守護者】 ここまで歩んできました 陳阿池	黒川 章子／訳	92
--------------------------------	---------	----

【衲履足跡】 寛仁な心で誠実に	心嫺／訳	102
--------------------	------	-----

慈濟大事記【十月】 清く澄んだ静寂な心 漫画	済運／訳 済運／訳 裏見返し	107
------------------------------	----------------------	-----

無畏施の菩薩行

◎ 訳・慈願

盛夏の季節に入ると台湾ではデング熱が全国二十の県と市に蔓延し、九月下旬には感染者が一万二千人を超えた。そのうち九十九パーセント近くが南部の台南、高雄、屏東に集中。患者が最も多い台南の各病院や高齢者施設に課せられた責任は重かった。

防疫専門家はこの一波の患者は十月末までに三万例を超えると推測している。地球の温暖化により、高温多湿の台湾では蚊の媒介による病が例年よりも

多く発生している。政府が積極的に防疫を行うほか、民衆が警戒感を高め、専門家による防疫措置に従うことが危機を逃れる方法である。

この病気の蔓延は私たちに清潔な環境を維持することの重要性を促している。環境維持は自分の家の周りに限らない。すべての家々は互いに通じているため、細菌、蚊、虫はその機会を伺って拡散する。

八月に台風十三号が台湾を直撃し、台湾北部の烏来が被災し汚泥が積もった。台南の多くの学校では倒れた樹木や葉によって溝がせき止められ、蚊発生の温床になりかねない。慈済はボランティアを動員して清掃に協力した。灼熱の太陽の下、腐臭の泥水の中で流れる汗を拭いながらの作業は、大変な苦労だったが、彼らは大地を清浄に戻すのだと喜んでやっていた。

一般に清掃は賤しい仕事と言われる。しかしながら汚いことも恐れず、忍耐

力を要するこの行為は「無畏施」の觀世音菩薩行である。《法華經》の中で觀世音菩薩を形容して、「恐ろしい救難の中であつても、施無畏（菩薩が衆生の恐れを取り除いて救うこと）は、娑婆世界では皆、無畏施者と呼ぶ」とある。衆人が憂い、驚愕している緊急時に身を挺して助け、人心を慰めることは、慈悲菩薩行として命がけでやることである。

この堪忍世界では確かにますます多くの「施無畏者」が必要になっている。新北市八仙樂園で起きた粉塵爆発事故から三カ月が経ち、医療スタッフとボランティアの付き添いが必要とされている。五百人近くの火傷患者の中、現在百人以上が入院治療を受け、そのうちのほとんどがリハビリを始めている。

一人の患者が退院後、火傷の傷痕のひきつれを生じるのを防ぐため圧力服を着なければならぬが、しかし堪らないのは痒みで、リハビリをやっても進歩

には限りがあると言う。想像するに、これらの若い火傷患者の一秒は一年のよう長く、それを日夜見守る家族もこのストレスを受けねばならない。

慈濟ボランティアは事件発生後、長期にわたって病院、地域で随時家族の需要に応えている。上人は、たとえ子供たちの皮膚が傷ついても、心まで傷を受けないよう導き、彼らが陽光に向かって歩めるように助けなさいと、言われた。

一人の親が感謝の意を述べていた。台湾の医療チームの精神と技術は国外の専門家も賛美するもので、この期間各界から愛の励ましを受けて私は人性の輝き、また台湾社会を改めて見つめ直したと言った。

台湾社会における「施無畏者」の菩薩行は確かに草の根の最も堅実で温かい力量である。



【台風十三号災害報道】

腰をかがめて泥を掃く 自然に屈服する

●台風13号がもたらした被害により、台湾北部・烏来の古い町並みや宿泊施設に大量の流木が流れ込み、浴槽の中には土砂が深く堆積していた；8月15日、この日は丁度土曜日の休日にあたり、約2100人の慈済ボランティアと民衆がウーライへと清掃活動に訪れた。

(撮影・王賢煌)

◎文・高亜梅、葉水琴／訳・日本語組ボランティア

●台風13号が8月8日、台湾の東部に上陸。強風と暴雨で新北市の新店区と烏来区そして三峡区に被害をもたらした。烏来区は全域にわたって深刻な被災を被り、4人が行方不明になった。道路が復旧した後、慈済ボランティアが被災状況を視察して清掃を呼びかけ、被災した民家や商店、郵便局とカソリック教会を含み清掃作業に取り組んだ。暴雨に流された土砂と流木が南勢溪沿岸の住民の家に押し寄せ、地下室の1階と2階が泥に埋まり、兵隊と慈済ボランティアが交代で清掃作業を続けた。

(撮影／王賢煌)





●大勢の人々が兵隊蟻のように一斉に被災地の清掃活動に協力していたが、その中には家族全員で参加した人、会社や団体関係者などもいた。若者もいれば年配の人もいた。人々はしばらく自分の事業或は学業を後回しにし、辛い清掃活動に喜んで奉仕した。被災者が一日も早く正常な生活を取り戻せるようにと願っていたからである。

(撮影／陳倪旺)



●店と地元住民の力だけでは、共にどれだけ努力しても限界があり、生計を回復する見込みがたらず、意志がくじけてしまっただろう。ボランティアとみんなが力を合わせたおかげで復旧は早まったのだ。長時間汗を流してやっと床の元の色が見えて来た。

(撮影／陳明清)



●温泉観光地の烏来は最も甚大な被害を受けた。被災した一階はその店が自分で片付け、地下室はボランティアが手伝うことにした。また環境保全局との協議により、川辺の店舗側にある土砂は川へ戻して土地を整地し、山沿いに押し寄せて来た土砂は一階へ運び上げ、流木は回収して役所の関係機関に渡し分類して再利用することになった。(撮影／黄春如)



●被災から1週間後、烏来地区の家屋の中には依然として土砂が堆積していたが、ボランティアは手分けして一斉にシャベルを入れ、汲み取って屋外へ運び出した。全身泥まみれになり、服は乾くとまた汚れ、その上腰を屈めなくてはならなかった。腰や背中では痛んだが、誰も疲れたとは言わなかった。

(撮影／陳李少民)



●ボランティアは4日間続けて新店区亀山及び廣興里等の被災地の清掃を行った。住宅は浸水、家具も損傷してしまったが、100名を超すボランティアが清掃に参加し、列を作って泥を運び出した。屋根の上ののった冷蔵庫もようやく降ろすことができた。

(撮影／王昱晴)

【主題報道】

八仙樂園粉塵爆発事故後。 勇敢な君たち

生死の境を彷徨う粉塵爆発の被害者たち
青春の肌は剥がれ落ち、肉親は白髪が増えた。
血と涙の治療過程において、
一日一日が勇敢に闘って来た足跡である。

●6月27日、新北市八里区の八仙樂園で粉塵爆発事故が起き、500人弱が火傷を負った。今では、退院してリハビリしている人もいれば、未だに病院で治療を続けている人もいる。8月下旬、慈濟病院の院長室外の廊下で一人の患者が友人に付き添われてゆっくりと歩いていた。（撮影・蕭耀華）

過去には戻れなくとも 未来は変えられる

◎文・李委煌／訳・済運



●8月下旬、ボランティアは新北市亞東病院で創傷病棟に見舞いに来る家族に隔離服を着せる手伝いをした。日常生活に関する些細な事でも、ボランティアは粉塵爆発事故の患者と家族が過ごして来た大変な時期も付き添って来た。(撮影・楊舜斌)

六

月二十七日夜、新北市八里区八仙樂園のライブイベントで粉塵爆発事故が起き、四百九十九人が負傷した。

九月十七日現在、未だに百四十二人が入院中だが、その中の二十八人がICUに入ったままで、十一人が危篤状態にある。残念なことにこれまでに十二人が亡くなっている。

七月半ば、私は慈済ボランティアと一緒に新北市中和区双和病院に負傷者を訪ねた。それは事故発生以来、彼らにとって何回目か数え切れない。病院の近くに住む林春金は揚げたての美味しそうなエリンギを持ってきた。そして、

方素真も自家製のコーンスープを持ってきて、休憩室で患者の家族と一緒に食事を摂った。

親しい友人に対するように、患者の父親がボランティアに涙を流しながら語った。「私は人生でこのようにして涙を流すとは思っていませんでした」。娘の容態は安定していたが、思いも寄らず肺に吸入火傷を起こしている可能性が出てきたのだ。本来なら今日にでも普通病棟に移る予定だったが、それは失望に変わった。このところ、毎日、予期しない事態に心を揺さぶられてきた。

他の負傷者の中には小腸を切断した人

や手の指が壊死した人、ICUを出たが再び戻った人、呼吸カテーテルを外した後、後に再び取りつけた人のことなどを聞いてきた。「負傷者の誰かが容態が変化したと聞くと、自分の娘のことが心配になるのです」と父親は焦りを見せた。内心の恐怖が終わることはなく、これからどうしたらいいのか分らなかった。

退院は喜ばしいことかもしれないが、世話する家族にとっては新たなプレッシャーの始まりでもある。ある女性は医者が退院手続きを始めるよう指示したのを聞いて慌てた。というのも、入院していた間は医療人員が介護してくれたが、「帰

宅後、主人の脚の包帯の取り替えや風呂、洗髪などどうしたらいいのか？」と彼女はあれこれ考えて眠れなくなった。

事故から一カ月

傷痕の増殖と痙攣に直面して

七月十八日、爆発事故から一カ月近くが経った時、台湾全土の四千人を超えるボランティアが二十五カ所の支部をインターネットで繋ぎ、火傷患者支援団体である陽光基金会・陽光之家の杜秀秀主任の「火傷患者の世話に関する知識概論―患者の心身両面の過程」と題する講演を

聞いた。

講演の内容は的確であった。

「傷痕の細胞増殖による痙攣はビニール袋を火に近づけた時のようなものです」

「火傷患者にとって火もそうですが、水も恐ろしいものです。傷口に水が触れると、普通の人には想像もつかないほどの痛みを覚えるのです」

「火傷患者が立ち上がった時、下肢が充血し、数万匹の蟻に咬まれているように感じられるので、絶えず動いたり小走りしたりします。他人にはそれが理解できず、唐突に感じられるのです。患者は体力

がなく、地下鉄に乗る時に優先席に座るため、あざ笑われることもあります。それ故、患者は身も心も傷つくのです」

傷痕の痙攣、気圧服、リハビリ用補助棒など聞き慣れない専門用語を書きながらも、講演の内容を患者と家族を世話するボランティアに知ってもらい、より適切な世話ができるだろうと思った。というよりも、患者が退院し、社会に復帰した時の状況を多くの人が理解していないため、より多くの人に知ってもらいたいのである。

火傷負傷者はいつも社会に存在しているがあまり見かけることがないような気

がする。私たちが彼らを見て見ぬふりしているのか、彼らが極力外出しないようにしているのか。それとも人々の偏見や不適切な対応が彼らの復帰を妨げる障害になっているのだろうか。

長いリハビリの道 皮膚は損傷しても心が傷ついてはならない

九月九日、多数の粉塵爆発による負傷者とその家族が慈済関渡園区を訪れ、證嚴法師に二カ月弱にわたる心の遍歴を語った。顔をほころばせる家族もあれば、

顔を曇らせたままの家族もあり、退院してリハビリを始めた人や危険な状態を脱したばかりで普通病棟に移った人、未だにICUで葛藤している人など様々である。

ある姉弟は爆発事故で負傷し、姉の方は重症の末亡くなり、弟は未だにICUに入っている。母親によると、息子がいつも姉の様子を知りたがっているが、どうやって返事したらいいのか分らない。父親の悲しむ様にボランティアたちは心を痛め、皆で彼が作った苦茶油を買い、一日でも早く仕事に復帰し、日常生活を維持しながら歩み続けられることを期待し

ている。

患者の中には一命を取り留めるために脚の切断を余儀なくされる者もいる。ある青年は両足を失った上、今回は感染症を防ぐために右手まで切断して大切な生命を守るしかなかった。毎日彼に付き添っている父親は涙を涸らしたことなく、「私たちはごく普通の親です。こんなことが起きるなんて思ってもいませんでした。だから、これをどうやって受け止めたらいいいのかわりません」と泣きながら言った。彼は子供に大金持ちになっただけでなく、平穩無事であることを願っているだけなのだ。息子

はまだ二十二歳で、これからどのような人生を歩むのか。「考えがまとまりませんが、受け止めなければなりません。今日までやって来れたのは、実は息子が私に悲しい顔をしないで励ましてくれているからです。今はもう一つの手の指が数本しかなくても、残してやって欲しいと祈っています」

母親はそれを機に一緒に来た患者や家族に、「今現在あなたが所有しているものを大切にして、リハビリを頑張ってください。そして、リハビリでとても痛い思いをした時、私の子供のことを思い出してあげてください」と言った。彼女

は息子が一カ月後に喉からチューブを抜き、初めて口から水を飲んだ時のあの感動を覚えている。「すごい！」。彼女は息子の強い意志に敬服すると同時に、生きてさえいれば希望があるのだと思った。

ある退院した患者は、「事故当日、僕は楽しさと恐怖と昏睡を経験し、果ては一時心臓が止まりましたが、今日は愛されていることを感じました」と言った。治療期間中、彼はこの難関を乗り越えることができるのだろうかと心配した。しかし、母が彼を失うことをとても恐れていることを知り、「強くならないわけにはいかない」と彼は思った。創傷清拭、水治

療、薬の取り替え、リハビリと堪え難い痛みに襲われながらも、彼は叫んだり泣いたりせず、彼を心配してくれている人たちをこれ以上悲しませようとしなかった。また、リハビリスタッフに「大丈夫、続けて！」とも言った。何が何でも健康になり、「両親に孝行し、事故で亡くなった友人のためにも勇敢に生きていこうと思いました。」

粉塵爆発事故による十二の負傷者家族の話聞き終えた證嚴法師は次のように語った。「怪我は子供たちの身の上に起きましたが、私たちの心の中もまた痛んでいます。慈済ボランティアが皆さんに付

き添い続けられることを望んでいます。そして、子供たちが皮膚は傷んでも心が傷まないよう祈っています」

この数カ月間、「慈済月刊誌」の記者は各病院に世話しに行くボランティアと同行して、火傷患者が直面している医療リハビリを深く理解すると共に、家族の感情面でのプレッシャーを感じ取ることができた。そして、一線に立っている医療人員が肉親に対するようにケアしていることに感嘆し、ボランティアたちが通常以上に無私の態度で付き添っていることに感動した。

関連文書によると、火傷面積が四十パ

ーセントに達すると、死亡率は五十パーセントに高まる。衛生福利部健康保険署の統計では、五百人近い粉塵爆発による負傷者の平均火傷面積は四十四パーセントに達し、台湾全土の医療機関による懸命な治療の結果、七割の負傷者が既に退院し、リハビリに取り組んでいる。慈済医療志業の林俊龍執行長によれば、このところ多くの国際的医療関係者が「これは奇跡だ！」と賞賛している。彼自身も医療関係者の専門知識と献身的な最大限の治療に敬服している。「これも世界記録の一つに入るでしょう」と言った。

直接患者に取材する時、彼らの将来を

考えると私たちも気が重かった。しかし、時間の経過と共に、彼らが回復に向って奮闘している様子を見、感動と生命力に満ちた希望を感じ取ることができた。

私は杜秀秀主任の言葉を思い出した。彼らが退院して我家に帰った後、自由を奪われた体を見つめ直すと共に、社会に復帰した時、他人の目を受け止めなければならなくなる。火傷した後の人生では、毎日、数多くの試練と挑戦が彼らを待ち受けている。今回の一連の取材を通して、多くの火傷患者や同じ道を歩んで来た人が痛ましい記憶を蘇らせながら自分たちの経験と体得したことを語ること、若

い負傷者とその傍らで成す術もない愛する家族を励ましていることに、私たちは感謝している。

人生の中で予期しない重大事故に遭った彼ら、火傷負傷者はリハビリに取り組んでいるが、社会の大衆は同情心で以て見守ってあげるべきである。幾重にも包まれた包帯や傷痕にレッテルを貼るのではなく、より良く理解してあげることが彼らに対する最も現実的な励ましなのだ。

火傷負傷に関する常識あれこれ……………

□ 退院イコール回復ではなく、傷口の治癒も回復ではない。

□ 火傷負傷者が数年または数十年の間に直面する諸々の手術：

段階一：創傷清拭、植皮などによる生命維持のための手術

段階二：皮膚移植など機能面を助ける手術。続いて整形、調整、保養などケア面での手術。

□ 火傷によるケロイドには、負傷した部分と移植する皮膚を取ったり植皮した部分とがある。例えば、火傷面積が六十パ

ーセントだとすると、退院後、傷跡は八十パーセントになっている。そして、異なった原因による傷跡には異なったケア方法が必要である。

□ 傷跡が完治していない時期は長いもので数年に達することもあり、増殖や痙攣、水泡、硬直、皮膚のひび割れや損傷、下肢の充血など行動に影響を及ぼし、ケアが必要となる。

□ 傷跡の増殖と痙攣は体全体や五官に変化をもたらす可能性がある。そのため、一定期間後に患者に接すると、容貌が変化していることに気づく。

□ 一部分の傷跡でも全身に影響を及ぼす

ことがある。もし、リハビリが遅れれば、顔面部に火傷を負った場合、傷跡の癒えが首の上げ下げや口に合わさり、瞼の開閉に支障をきたし、日常生活の質が大きく影響される。

□ 腕や掌、手の甲に火傷を負った場合、リハビリが遅れると、手の指が反ったりするため、リハビリと手術を繰り返さなければならぬ。

□ 加圧服は傷跡を垂直方面に加圧することとはできるが、長期間、着続けなければならぬ。平均的に圧力が掛かれば増殖

が起きても、最低限且つ平均的に抑えることができ、回復後の傷跡の見栄えが良くなる。

□ 傷跡の癒えは持続的に起き、一日中感じられるためその対応に追われる。一時間程の風呂の時間を除いて、寝る時も家族の手を借りて「牽引」や「添え木」でリハビリをしなければならない。

□ 退院しても傷痕の皮膚は非常に弱く、簡単にひび割れたり、リハビリ時に裂けることもある。また、加圧服が擦れて傷ができることもあり、それによって世

話する家族が気落ちすることもある。

□ 火傷負傷した後、長期間、病床に横たわっていたために、持久力が急低下し、あまり立ち上がれなくなる人もいる。患者の体格が大きくても、実際は長く立っていることができず、友人などの期待と落差が生まれてしまう。

□ 火傷患者が退院した後、心肺機能や皮膚、精神面による障害のために頻繁にあちこちの病院や様々な外来で医者で通うことになる。そのため、自宅に近い薬剤師に頼んで「薬物管理」を徹底してもらうことが大事である。

□ 火傷患者の中には安心感がないため「座ったまま眠る」人がいる。万が一の

時に素早く反応できるからである。余りにも危機感が高いため、すぐに目が覚めたり悪夢を見る。そして、睡眠の質が悪いために、日中の体力とリハビリに影響する。

□ 娯楽や趣味の中断、人間関係の変化、社会参加の減少、容易に得られない家族の支持、行動障害、容貌に対する劣等感、人々の差別などは患者が社会に復帰する時の障害になる。

□ 喪失感と挫折感は創傷患者にとって、事故発生の当日だけでなく、絶えず日常生活の細々とした事の中でも味わうことになる。

歩行練習と共に

始まる新たな人生

◆黄子羨 26歳 サラリーマン

八仙樂園粉塵爆発事故で全身に七十六パーセントの火傷を負った。入院して四十五日だが、体が目に見えない鎖で縛られたように行動が不自由である。それでも、彼は日陰で生きようと思わない。

歩行の練習から始めるのだが、彼は前向きに進むことができる。それは時間が証明してくれる。例え一身体に傷痕が残っても、心の傷は次第に癒蓋ができ、やがて癒えるだろう。

◎文・黄秀花
訳・済運
撮影・顔霖沼



ゆ

つくりとリハビリ科に入つていくと、ほとんどが年配の患者の中に混じって、嫌でも若い人が目につく。しかし、黄子羨は何とも思わず、八月中旬から毎週三回大林慈濟病院に通っており、それはすでに彼の生活の一部になっている。

●黄子羨（左）は退院後週に3日、大林慈濟病院で集中的にリハビリを行っている。リハビリ療法士の指導の下に、彼は努力して引き上げ動作や腕から肩に掛ける筋肉を伸ばしていた。それは萎縮したり固まるのを防ぎ、身体機能を維持する目的である。

職能治療室で、左右の腕にそれぞれ一キロの砂袋を縛りつけ、右手を左方向へ首と頭部を経過して力いっぱい上に引き上げたり、その手で小さな積み木を高い場所に置くという動作を繰り返していた。それは重力を利用して腕と肩の筋肉を広げる訓練で、痙攣と凝り固まりを防ぐためのものである。

そして、物理療法室では揺れ動く平衡感覚を養う板に立ち、両手を手すりで支えながらしゃがむ動作を行った。両足は強いだるい痛みを覚え、固くなった膝も痛んだが、我慢できないほどではない。

最後に彼は一直線を歩いた。「もつと歩

幅を大きくして!」。リハビリ療法士が声を上げた。続いて後ろ向きに歩いた。後ろが見えないので少しよろけた。それは膝や足首及び踵の筋肉を鍛える訓練である。彼の場合、最もひどく火傷したのが両足で、早く伸ばしたり引っぱったりしなければ、傷口が癒えた後ではリハビリが余計困難になり、その効果も大幅に下がってしまう。

二時間が過ぎ、黄子羨は顔の汗を拭いてから疲れた体で父親が迎えに来るのを待たため、病院の入り口に向かった。途中で彼は休憩し、腰を屈めて膝を揉んでから再び歩き出した。自称「スポーツ強要

シンドローム」の彼にとって、前代未聞のことである。以前はどんなに走ったり飛び跳ねても疲れを知らなかったが、今は歩くだけでも容易なことではない。

負傷してからは以前できたことが今はできない。行動は大きく制限され、目に見えない鎖に縛られたような感じた。今は過渡期であり、彼は勇敢にそれを突破することができ。しかし、今回の事故で、彼は家庭の大切さを思い知らされた。以前、彼にとって家は道の途中にあるもので、長居することはなかった。今回、重傷を負ってから、父親は献身的にケアをしてきた。彼は、父親が歳を取ってきて

いると共に、自分も歳を重ねてきていることに気づき、もつと成長して物分かりが良くなるべきだと悟った。

ロック歌手が経験したシンセ・パーティ

二十六歳の黄子羨は雲林北港出身で、北部に働きに出てきた。不動産仲介業者や警備員職などを経験したが、明るく話し好きで社交的な青年である。大学時代、バンドを結成してボーカルを担当した。彼はロック歌手のように髪を伸ばし、ヘビメタルを好んだ。

「僕は本当はシンセ・パーティーには興味がなかったのですが、友人が入場券を四枚買ってきて、招待してくれたのでついて行ったのです」。こともあろうに、神様はあんな大きな試練を与えた。事故当時、彼はパーティー会場の前方中程の所にいた。突然、舞台の方から火花が飛び、一瞬にして会場が火の海になった。彼は一口大きく息を吸い込んでから後ろの方で走った。走っている間、熱いと感じただけで、痛みは感じなかった。外に出た後、自分の足の裏の皮がすでに前の方まで剥け、血まみれになっていたのを見てびっくりした。

気を静めて周りを見渡すと、泣き叫んでいる人でいっぱい、友人の姿は見当たらなかった。彼は遠くない所に飲み物を入れた大きな樽があるのを見つけ、疲れきった体を這ってそこまで行き、樽の氷水に足を浸けた。しばらくして誰かが彼を流水プールの中に運んだ。そこには多くの負傷者がいた。「僕はずっと眠たかったのですが、側にいた人が眠らせてくれませんでした」。彼がショック死するのを恐れて目を覚ましているよう励ましたのだ。その間、一人の慈済ボランティアが「怖がらないで！」と彼を慰めてくれた。三時間近く待って、やっと救急車に

乗せられた。

台北慈済病院に着いた時は十一時を回っていた。手元に携帯電話がなかったのだ、両親の電話番号を思い出すことができなかったが、実家の電話番号だけは覚えていた。ソーシャルワーカーの林家徳が連絡を取ってくれたが、九十三歳のお祖母さんが振り込め詐欺だと思って取り合わなかった。林家徳はフェイスブックを使って連絡を取ることを思いつき、

●黄子義は7月下旬にICUを出た。父親は大喜びで迎え、医療チームも普通病棟までつき添った。
(写真の提供・台北慈済病院)



やっと子羨の友人という形で、座禅の修行に精を出していた父親にメッセージを送ることができた。

翌朝、父親がやって来て、子羨の友人と共にICUに入った。友人は泣き続けていた。というのも、友人はここに来る前に別の病院で昏睡状態の友人を見舞って来たばかりだったのだ。

黄子羨は火傷面積が七十六・一パーセントと診断され、一時は生命の危険を通知された。泣いている友人を見て、意識がはっきりしている子羨は、「胸の苦しみも動悸もなく、呼吸が正常で意識もはっきりしているので、大丈夫なはずだ！」と

心の中で思った。

冷静で落ち着いた奴

事故当時、黄子羨は口と鼻を覆っていたので、吸入性火傷は軽くて済み、不快なカテーテルを入れた治療からは免れた。しかし、体の大きな面積における火傷治療の薬の取り替えが彼に最悪の苦痛をもたらした。「僕は『薬交換恐怖症』で、看護師が近づいてくると、緊張と恐怖が走りました。本当に痛かったのです」と彼は正直に言った。

そして毎回創傷清拭手術してICUに

戻ってくると、体力が弱って体が冷えきり、布団を三枚かけた。例え、照り焼きの機械を使っても寒さに震えていただろう。

激しい痛みのため、鎮痛剤で抑えるしかなかったが、少し痛みが収まると、彼は首を回して看護師たちの仕事を眺めた。

そこで彼らが本当に忙しく、一刻も手を休めることがないのに気づいた。患者が水を飲みたいと思ったらトイレに行きたい時は、ベルを鳴らせば、看護師がやってくる。「それでは自分は廃人と同じで、何事も他人に頼らなければならない」

体がどんなに痛くても、二時間に一回、

体の向きを変え、血圧を測ったりレントゲン検査があり、夜、睡眠が十分でない時は、昼間に眠る。「よく眠れましたか？」「喉は乾きますか？」と看護師の方から聞いてきたり、心理療法師が尋ねてくるが、普段彼はあまり返事をせず、眠っていただけだった。

ICUにいと、一日中天井を見つめるだけの生活で、その一カ月近くの間、一日が一年のように長く感じられた。毎日、一番待ちこがれたのが朝晩二回の面会時間で、仲の良い友人が大勢来てモニターを通して会話してくれた。父親もフェイスブックに書かれた見舞いや励ましの言

葉を全部書き出して、一字一句読んで聞かせてくれた。その時が彼にとって最大の慰めであった。

「僕はずっと回復できると信じていました。『死』を考えたことはありません」と黄子羨が言った。彼は終始自信を失うことはなく、肯定的に物を考えていた。心理療法士が彼と対話した時に、悪夢を見たり突然びつくりするようなことはあるかと聞くと、彼はいつも「ない」と答えた。そういうわけで、周りは彼のことを「冷静で落ち着いた奴」と言うようになった。

二回の植皮手術をしたが、彼の回復は

うに、元気が出てきた。医療関係者だけでなく、親しい友人たちもびつくりした。彼が入っている個室には、壁いっぱい友人たちが書いた祝福の言葉や日常生活の写真で埋めつくされ、いつも誰かが食べ物を持って来て一緒に食べていた。

最初の一日、二日はベッドに横たわり、父親の手を借りて大小の世話をしてもらう必要があったが、やがてベッドを降りようと試みたところ、長くベッドに横たわっていたために真っすぐ立っているだけでも難しいことに気づき、悩んだ。数日後、体につないであつたチューブを一本ずつ取り外すことができるようになって

良好で、ICUから出る頃は看護師たちに「どこに住んでいるの？ 何時まで仕事？」などと会話するようになっていた。

これは彼からの謝礼なのだろう。その「冷静で落ち着いた奴」は言葉にこそ出さないが、心の中では医療チームの昼夜を問わないケアに深く感謝しているはずだ。

ベッドから下りて立ち上がり、歩く練習をする

普通病棟に移ってから、「暗闇から輝く場所に来たような感じ」と黄子羨は形容した。彼自身も別人にでもなったかのよう

てから、歩行器を使って立ったり歩いたり練習を始めた。リハビリ療法士の指導と矯正によって次第にうまく歩けるようになった。

入院期間中、一番よく世話してくれたのは父親である。彼がまだICUにいた頃、父親は毎日、息子と他の負傷者を加護してくれるよう、病室の外でお経を念じていた。普通病棟に移ってから、彼は初めは鼻チューブを通して栄養を摂っていたので、父親は持ってきた高タンパクの栄養食品を時間をかけて与えていた。また、チューブを洗浄、消毒したり冷蔵庫に収納するにも時間がかかった。それが

終わって一時間もすると、同じ動作を繰り返した。一日六本の栄養分を点滴し終えるのが午前一時近くになることもよくあった。

この他、夜中にトイレに行きたい時は、父親が尿瓶を持って来たり、彼を支えてトイレに行った。彼の食事は主に流動食なので水便が多く、父親はオムツを取り替える時、水便が出ていたらすぐにベッドシートも取り替えた。父親は一度も疲れを訴えたり文句を言ったことはなく、逆に息子がICUにいた間、介護人員がどれだけ大変な思いで彼を世話していたかをつくづく理解した。

四十日間 病床に付き添ってくれた父

「父は僕の世話で、疲れ果てたと思う」と黄子羨が言った。彼はかつて父に対して愛情表現をした記憶がほとんどない。彼の父は敬虔な仏教徒で、父の彼に対する教育方針は自由にはさせるが、向上心と善の心を持つよう注意を喚起してきた。「頼まれれば拒まず、自ら事を求めず」というのが父の教えである。普段、父はあまり子供のことに構うことはないが、何かあって、父にやつてもらいたい時は必ず来てくれる。子羨も父に生活の近況を

報告する。父子はそれほど親しくはないが、心は通じ合っている。

子羨の交遊が広いのは父も知っており、いいことだと思っていた。事故の後、

あれほどたくさんさんの友人が心配して来てくれるのを見て、息子を自慢に思った。今回の事故に際して、父親は内心大した感情の起伏もなく、事に当たっては感

●負傷してから新たに学び始めないといけないことがたくさんある。例えば、腰を曲げて床にある靴を拾い上げるのも大変なことである。しかし、黄子羨は忍耐強く、一つ一つ克服している。





●2時間のリハビリが終わると、黄子羨は疲れるが、汗を拭いた後、腰を伸ばして前に進む。彼は父親の細心の世話によって自分に自信を与えてくれたことに感謝している。

れて行き、菓の取り替えまで学んできた。父親は陽光基金会の人に教えてもらって傷口の老化した皮膚の処理をした。ま

親の話は子羨にも影響を与えた。「以前からずっと父は僕の手本なので」と子羨が言った。以前、大学で教鞭を取っていた父が、カテーテル治療をしていた祖父の世話をするために早期退職した。後に祖母の世話をする事になり、

情の移入をしてはならず、泣いたりわめいたり、または怒りをぶつけても何の足しにもならないと言った。「悲しんでも事実を変えることはできず、起きてしまったことは勇敢に受け止め、自分が苦しみを味わえば、他人の苦しみも分かるのです。子羨が今回の災難を通してより深く体得してくれることを望んでいます」。父親の話は子羨にも影響を与えた。

余計に遠出ができなくなった。今回、父は北部に来て彼の世話をしているが、家を離れて四十日以上経っており、最長記録である。「僕が父を巻き込んだのです」と子羨が言った。「父のようにきめ細かく世話してくれる人は多くありません。父は看護師に教えてもらい、果てはシーツの取り替えも手慣れたものになりました」。八月半ばに退院して北港に戻ってから、父は今まで以上に世話するようになり、毎日細心の注意を払って作った三食のほか、おやつまで用意してくれる。そして、一日毎に彼を大林慈濟病院にリハビリに連

ずガーゼで覆い、次に生理食塩水をかけ、三〇五分浸透するのを待ってからガーゼを取り除き、その後、軽くこすれば、皮膚がボロボロ落ちてくる。処理した後の皮膚はつやつやして柔らかく、その上にベビーオイルや乳液を塗って保湿し、痒みを軽減させている。

この五、六年間、黄子羨は他県の大学に行き、就職していたので、父親とは遠く離れて暮らしてきた。しかし、事故発生以来、彼らの距離は縮まり、親子間に言葉は多くはなかったが、細かい動作の中に確かに父親の息子に対する深い愛を見ることができた。

心の傷痕を癒す

父親の努力を黄子羨は見ていたし、感謝している。友人が家に見舞いに来ると必ず、「安全に注意を払い、命を大切にしないさい。絶対に他人を巻き込んではいけません」と父親は言った。

それは経験した者の心から出た言葉である。自分の傷ついた体で以て教えを示すことで、世の中の人々が警戒心を持つてくれるのであれば、彼は表に出る用意がある。また、傷口が治っても跡が残ることに対しては、「僕は男だから、傷が多少増えてもどうということはありません。

一番大切なのは身体機能を維持すること、多少醜くなっても構いません」と彼は冷静に状況を受け止めている。

大林慈濟病院のロビーを歩いていると、好奇の目で見る人もおり、「君は粉塵爆発事故の負傷者なのか？」と聞いてくる人もいる。彼は臆することなく認めるので、相手は「頑張れ！」と励ましてくれる。

何事も自分の態度一つで決まる。黄子羨は陰に隠れて生きていくのではなく、勇敢に社会に出てゆきたいのだ。リハビリにも精を出し、できれば一、二年の間に社会に復帰したいと思っている。傷は十

パーセント以下まで縮小しているが、下肢を伸縮する時にはまだ、かなり痛み、長くベッドに横たわった後はまず、体を反らしてからでないとうまく立てない。しかし、彼は痛みに耐えるのは問題ないと言う。「薬の取り替えを八か九の痛みとすると、リハビリは一の痛みしかありません」

彼の最も傷ついた場所は両足で、深度が三度だが、胸や背中と上肢は二度であり、幸いにも手の指は火傷していない。それ故、彼は自分でいろいろなことができ、手を回して背中を搔くこともできる。髪の毛を剃った彼は、脚にはまだ、包帯を

いっぱい巻いている。しかし、怖じけることなく、時間が証明してくれるように、全身の傷は次第に癒えていく。たとえ傷痕が一生つきまともっても、やがて心の傷痕には瘡蓋ができ、癒えるだろうと彼は信じている。

それよりも彼は父親の励ましを忘れることはない。「将来、衆生の苦しみに自分の責任を感じ取って欲しい」。何と素晴らしい言葉だろう。「絶対に心に銘記し、人の役に立って、人生をもっと有意義なものにします！」



最も美しい容姿を 正面から見て思考する

◆顔曼如 20歳 大学生

童年の時の火災で、

顔や手首に火傷の傷痕が残った。

九年間自分の傷痕を見続けてもう習慣になったと笑う。

自分は意に介さないが、他人はそうでない。

美醜に一定の基準というものはあるだろうか？

世の人の目にどれだけの影響が？

他人のいたわりと慰めを嘘だと受け止めていたが、
今は真心からだったと信じている。

◎文・黄秀花

訳・慈願

撮影・顔霖沼

灼 熱の盛夏に顔曼如
は、顔や両手にある

火傷の傷痕も気にせず、身
軽な半袖のTEEシャツ姿
です。九年前の中秋節の深
夜、電線発火による火事は
無情にも兄の命を奪い、当
時十一歳で小学六年生だっ
た彼女は、三カ月間ICU

で見守られやっと思死神の手から逃れられることができました。

全身に六十パーセントの重度火傷は治療の甲斐あって命は助かったものの、両足を膝下から切断され、その後は自分の両足で地に立つ感覚をなくしてしまいました。

全身の火傷傷跡だけでなく、両足の義足という苦境にあっても中学では総統教育賞を受賞し、さらに陽光基金会（火傷患者に対する基金会）の奨学金を二度受賞し、台北第一女子高校に合格、卒業して今は大学で勉学に励んでいます。青春を謳歌するはずの年月に、浚渫とティーンシ

ヤツにショートパンツが履けないことは二十代の娘にとって遺憾なことです。両足を失った九年の月日を振り返ってみると、一歩一歩が氣力を以て前進してきた足跡でした。

いつの日かチャンスのくることを期待して

もしも氣をつけて見なかったら、曼如の両頬にある傷痕ははっきり見えず、普通の女の子よりも美しい娘です。他人の目に映った時、好奇のまなざしが彼女の心を傷つけないように願っています。

「私は自分の顔を九年間も見つめて、慣れているから、気にしないけれど、反対に他人が気にしているようよ」と冗談のように言います。彼女は自分でもあまり

覚えていないが、傷痕の調整に三回、植皮に五回、足の切断に一回、傷痕を平らに削ったのが二回、気管のレーザー照射が三回だったと思います。でも確かなことは、背中、腹部、太もも、頭のとっぺんまでの皮膚は植皮によって傷を覆っていることです。

朗らかな彼女は、「私は夏が嫌いです。あちこちの傷痕が露出するのが嫌いではなく、火傷の傷痕の皮膚は発汗作用を失っ

ているので、大粒の汗が頭から耳元まで流れるのが気持ち悪いから。とくに前髪の一本一本に汗が伝わって流れるのがとても嫌でした」と話す。

火傷を負う前は泳ぐのが好きでよくプールへ行きましたが、両足を失ってから他人に迷惑をかけたくない配慮から九年間泳いでいません。声も素晴らしかったですが、吸入性焼灼の影響を受けて二、三年ごとに手術をしなければならぬので、息が長続きしなくなりました。

歩く時も義足との摩擦で、皮膚が擦りむくため運動量も少なくなっています。ある夏休みに友達と川辺へ遊びに行った

●2009年、顔曼如は中学2年生の時、重度の火傷を負っても積極的な人生観と優秀な成績によって總統教育賞を受けた。馬總統（左から2番目）と顔曼如（右から2番目）。（写真／顔曼如）



時、義足では川の中に入れないので石の上で楽しそうに遊んでいるのを見て我慢できず、「水の中を踏んでいる足はどんな感覚がするの？」と聞くと、友達はやさしく「手を水の中に入れてごらん、それと同じ感覚よ」と答えた。

彼女は心の中で何度も、どうしたら義足を取って水の中へ入れるかその方法を考えながら、チャンスがあれば実現したいと思っていました。

上辺の美にとらわれずに

今年五十歳の米国女優サンドラ・ブロ

ックさんは、米誌「ピープル」で2015年の「世界で最も美しい女性」に取り上げられていましたが、彼女はこの榮譽を断りました。彼女は、現代人は青春を崇拜し、若さに魅惑されがちで外貌を称えるが、彼女は自分の子供が成長した後、正確な価値観をもって世の人が重視する上

辺の美に取りつかれないように願っていたのでした。

またブロックさんは老母の顔の皺、手のひらの胼胝^{たこ}、子供たちが転んだ時の傷痕などに、温かい生命の美を感じ、動すると言っていました。曼如はこの文章を読んでとくに「傷痕」の二文字が脳裏

にこびりつき、中でも顔の損傷者にとつてうなずくことができました。

これから見て、傷痕は美の範囲としてどのように位置づけられるでしょうか？

もう一種の人の目を魅惑する美ではありませんか？ それならリハビリの勇気と努力はどうでしょう？ もう一種の人を感動させる美ではありませんか？

曼如がブロックさんの美に対する見方に同意したのは、彼女もブロックさんと同じく社会で言われている、これは美しい、あれは美しくないのというの是一种の価値観による暴力だと思っているからです。美はもっと多くの方式で表現され

るはずだと思っています。

曼如は、将来の就職におけるインタビュールに対する時のことも考えています。人の第一印象は外見とは無関係だと思うが、一般の上司は外見を重視し実際の能力を軽んずる傾向にあります。例えば顔に傷のある者、肢体に欠陥のある者は、いくら能力があっても、モデルや客室乗務員にはなれません。

台湾における「顔の平等の権利」とは、陽光社会福祉基金会（重症火傷患者のサポート団体）が、長年にわたって火傷を負った者を助ける以外に大衆に推し進めている観念です。蔑視や悪意で彼らを見

ることは彼らに対して一生拭い去ることのできない心の傷と自卑感を負わせることになりかねませんから。

八仙樂園の爆発事故が発生してから、「顔の平等の権利」の問題は多くの人の課題になり重視されています。この機会に多くの人がこの観念を知り、考えを改めなくてはなりません。

最も力強い両足

ある時エレベータを待っていた時、子供が曼如を見て母親に「この人どうしたの？ 怖いね」と言いました。母親は子

供の口を手でふさいで、「火遊びしたら駄目よ。おとなしくママの言うことを聞くのよ」と。実は曼如は火遊びをしたのも、親の言うことを聞かなかったのでもなかったのです。

二〇〇六年の中秋節の夜の出来事がありと浮かびあがります。家具や仕切りの壁は焼け焦げて炭のようになり、変形した窓枠、爆発後のタイルやガラスの破片は二台の大型トラックで運び出された、というのを見ても、この爆発がいかに大きかったか窺い知ることができます。

曼如に事件前の様子を聞くと、水泳と歌を唄うのが好きで、テニスや朗読に参

加していたのですが、事件後は家族が彼女をいたわってたとえ家の近所や公園に行くことも許しませんでした。

入院の当時は身の周りのことは皆がやってくれるので、両足をなくした実感が



●大学に入って間もない頃（右から1番目）、母の故郷の台東県長浜郷に帰って親戚や友人たちとアミ族の伝統衣装を着て撮影した。（写真／顔曼如）

なかったのですが、大分回復して退院近くになるとトイレや水が飲みたい時はベルを押して他人に頼わなければならない時に初めて、これからの人生は多くの事に挑戦しなければならぬことを実感しました。

高校に上がる前までは父が送り迎えをしてくれて、父が忙しい時はタクシーで帰っていました。中学校に上がるとクラスメートは弁当を持ってきてくれたり、車椅子を押してくれたりしました。皆がいろいろと世話をしてくれて学校の有名な人になっていました。今では自分で義足を履いてバスや電車に乗って一人でどこ

へもでも出かけます。大学では人文サークルの幹部になって、彼女は力強く両足で前向きに歩いています。

この九年来、彼女の心は傷痕が癒えると共に変化しているのでしょうか、それとも傷痕が彼女の成熟を加速させているのでしょうか。火傷治療から退院してきた時、近所の人は「どうしてこんな大変な傷を?」「火傷して大変だったね」「でも相変わらず綺麗な子だから」と口々に言った好意の数々は、幼かったから口先だけの慰めと思っていました。今では考えが変わりました。相手の人が誠意であろうがなかろうが、自分は誠意をもつ

て自分に対していこうと。他人が自分をどのように見ようともそれは大切なことではなく、いかに自分を見つめるかが最も大切なことだと言います。その実この一言はすべての人に適応するものだと思います。個人の美は各自の定義にあり、各自の生活、また輝かしい発展にあります。曼如や八仙楽園の被害者、また世の中の火傷を負った人たちに心から声援をお送りします。

●心と身を調節して傷跡の障害を乗り越えた顔曼如は、多くの人が「顔の平等の権利」に関心を持つように、そして傷ついている人たちが自分の美に気づき、さらに自在になるように願っている。



【證嚴法師のお諭し】

◎訳・慈願／絵・葉錦蓉



修行は深くして 善縁を結ぶように

信根が深く広くあれば

強風にも不動

逆境をも受けいれれば

悪縁は解ける

深く修め善縁を以て

福田は広く造ること

フィリピンのハイエン風災から二年が経ちました。この災難は七千人余りの貴い命を奪い、フィリピン中部に深刻な破壊をもたらしました。慈済はその直後から開始した救難活動から現在の長期復興支援に至るまで、今でもとぎれることなく支援を続けています。九月中旬からタクロバン市、オルモック市、パロ町、タナウアンなどの被災地に、六万袋の台湾の愛がつまった白米を贈っています。現地青年たちは慈済ボランティアと一緒に家庭訪問をして配付名簿を作成していました。当日は配付の行われる会場の整理、米をもらった高齢者や子供

には家まで米を担いで送った後、自分の米を受け取っていました。その中の一人は、「お米をもらっただけでなく、自分に人を助ける奉仕の能力があったことが嬉しかった」と言いました。

彼らの笑顔から、彼らが心から楽しんでいることを推し量ることができました。楽しみの中に豊かな愛があり、奉仕する中で生命の価値を創造していました。この感謝と愛に満ちた様子は本当に美しいものです。

タナウアン鎮の米配付会場で、住民は竹筒募金のお話を聞いて、次々に空のペットボトルに銅貨を入れていました。一人

ひとりの少ない銅貨でも寄せ集まれば大きな力になって人助けができます。一滴一滴の愛が集まれば無限の大愛となるのです。

親しい間柄でもなく、言語、肌の色も違いますが、風災による因縁で奉仕に行った慈済人と、お互いの距離が縮められました。物資に困っている現地の住民は心を広げて、慈済の心からのいたわりと奉仕を受け入れて、今では慈済のように自分たちもボランティアになって助けを必要とする同胞に寄り添い奉仕しています。

アフリカ南部の慈済ボランティアも

また、貧困の村々に台湾の愛が込められている米を贈りました。ある村の人は、気が荒く常に衝突事件を起す上に治安が悪く、よそ者を入れませんでした。しかし、慈済ボランティアは真心から村中の寄る辺ない高齢者や障害者の世話をし、慈悲と智慧を用いて少しずつ近づけ、大愛の情が成立しました。

今年の配付で村人はお礼に「阿弥陀仏」または「ハレルヤ」と言って、親切にボランティアにこたえていました。

フィリピンでもアフリカでも、慈済人は長い間にわたって、この世に造福する使命感を抱き、宗教の差別なく愛を持つ

て接触しています。苦難にいる人々を助け起こすだけでなく、彼らの心霊に愛を啓かせ、その人たちもボランティアになって、苦難の人々に温かく接するようになると努力しています。

南アフリカの黒人菩薩のように、彼ら自身の生活は苦しくても、心に法がありと人生の苦に通達することができて、恨みや痛みから抜け出すことができます。他人からの救助を待つだけでなく、さらに進んで奉仕し村人の困難も助けるだけでなく、他国の貧困者のケアもしています。彼らの身の上から、人々には仏性が具わっているのです、どんな人にも人を

助ける能力のあることが実証されます。



嘉義にいたる精神障害者の青年は、いつもゴミを拾っては持ち帰り、家の中はゴミがうず高くなっていました。ある時放火に遭い、燃えている所を刀を持って振りまわし、近所の人たちは非常に困っていました。が恐ろしくて近寄ることができませんでした。

公衆の安全のため、隣組長は彼の父親の同意を得て、慈済人にゴミを片づけてもらうことにしました。しかしボランテ

ィアが行った時、青年は中へ入れません。彼の叔父さんが彼をなだめて、ボランティアに台所から入るように言いましたが、見つかつて彼は「泥棒がきた」と叫びました。

慈誠隊員は彼の注意をそらそうと話しかけ、彼に胸にかけているお守りの神様と喧嘩するかと聞きました。彼はお守りを指さし「これは王様だ、これは観音菩薩で、神様だから喧嘩しないよ」と。ボランティアは彼に慈済人は観音菩薩のお使いであなたの手伝いにきたのだから怖がらないでと言うと、彼はやっと静かになってボランティアが部屋を掃

除するのを止めなくなりました。

五十人の慈済ボランティアと地域発展協会の人たちが、大量のゴミを整理している中で、四十本以上の刀が出てきたのを布袋に入れて、万一彼に発作が起きた時人を傷つけないよう配慮して始末しました。

十年以上も徐々に積み重なったゴミの山は青年の寝る所がなく、ゴミの上で寝るしかありませんでした。今見るとゴミの山に覆われていた壁や床は姿を現し、きれいに洗われています。その上ボランティアはベッドまで運んできて部屋の中は一新しました。それを見て滅多

に笑い顔を見せない青年に笑い顔が見られ、ボランティアはこれから度々来ることを約束しました。

お互い縁もゆかりもありませんが、慈済人は「不請之師（請われなくても師となる）」になって根気強く相手の同意を得て喜んで尽くしています。悪臭と汚いゴミを見ても気にせずひるまず、堅い奉仕の一心はただ彼の環境が良くなることを願い、地域に蚊や害虫の発生しないように望んでいました。

清掃作業がどんなに苦労でも、慈済人が喜んでやっているのは、その中で苦諦を理解し、自分の身が健康であるから奉

仕できることに感謝しているのです。

「経者、道也。道者、路也」と、人のために経文の道理を話すよりも、寄り添い身を以て導き正しい道を示すことが肝心です。奉仕は見返りを求めず、暗闇や苦難にいる人が一日も早く平坦な大道に邁進し、助けを受けた人が成功して助ける人になることを願っています。

戒を守り、上善を修め、人々を仏と見做して敬い、名利を求めず、求めも企図もなく、志は一心に衆生に利益する、これが人間菩薩です。菩薩の道を歩く上で、一人ではあまりにも寂しく、二人でも足らず、三人でもまだ力が足りませ

ん。百手千手に呼びかけて一緒に正しい悟りの道を切り開いて、人々を正確な方向へ導きましょう。

現在を把握し

一瞬をとこしえに

善行を怠らず

休みなく

この善念を永劫のものにしよう

苦難の多い世間では、平穩の人は福を大切にし、さらに多くの福を造ること。

台北に住む廖定興と李佳樺の夫妻は慈済功德会に参加して三十五年になり

ました。早期に私が病院建設の念願を發

表した時、佳樺は協力することに発心立願して熱心に支援金を募り、十年間も貯蓄して買った金塊を病院のレンガに替えました。当時警察官だった廖定興は病院でボランティアをするという妻に賛成し、自分も退勤後は活動に参加して、慈誠十八隊の隊員になっています。病院開業後は医療ボランティア、その後はカメラを持って慈済記録係のボランティア十九号になりました。一九九九年の台湾中部大地震後の希望工程（学校建設支援）や慈善、医療、教育、人文などのあらゆる建設工事の記録を残す上で、彼

はなくてはならない存在です。

佳樺は二度も大きな自動車事故に遭っています。慈済ボランティアとして精進する道は途絶えたことがあります。廖定興は今年九十歳になりますが、健康で慈誠隊員の当直でも欠席したことがなく、勤務時間のない時は環境保全センターで手伝っています。この精神は長者としての模範です。夫婦は純粹で広い心を持つ同志であり、三十年来良いと思うことはやり、慈済に深く投入していることに感服させられます。

慈済は、慈善活動を行っているだけでなく、宗教精神を兼ね備えた団体です。

「宗」とは人生の宗旨であり、「教」は終生に亘る教育です。この大家庭に投入する一人ひとりが修心養成を願ひ、端正な行為で、人々に奉仕し、老いてもなお学ぶよう願っています。

一日は八万六千四百秒ですから、この秒間の一念に着実な行動を以て善美の歴史を書き下ろすか、それとも心の起伏で安定しないなら八万六千四百の煩悩に満ちてしまいます。貴い時間をつまらないことに浪費していると、容易に社会問題を引き起こすことになります。どうすれば一念の善を永劫のものにすることができのでしょうか？ それは、

この一瞬を把握して刹那を永久のものにすることです。「一日過ぎると命もそれに従って一日短くなる」のですから、分秒を惜しんで絶えず正法を吸収して着実な行動を以て正確な方向に向かって奉仕をするのです。自分の生命に責任を負うだけでなく、多くの人を導いて菩薩道へと前進して、正法を永続させることです。

時は長河の流れのようにあつという間に流れ去ります。持続を必要として法を聴き、法を説き、法を伝えるには一歩一歩入念にしていれば、たとえ日一日と老いても、慧命は日一日と成長します。

悪念が起きると

心は猛獣と化す

善根を培い

信力は堅固にして

悪癖を調伏させること

に直すと仲良くなれるよ」と少女は言いました。

カナダにいる六歳の少女はいつも些細なことで喧嘩し譲り合わない両親を見て、母親に言いました。
「ママは、パパの友達になる準備をしたら？」
ママは答えて「そうね」と。

「では試してみたら？ お高くとまっ
ている悪い癖を直して、低くして良い癖

それから続けて、「悪い世界に生きていたら、最後には皆が猛獣になってしまふよ。もしもこの世界に良い人が少しでも残っていたら、私たちも食べられてしまふ。そしてこの世界に良い人がいなくなつて、猛獣ばかりになるでしょう。だから私たち頑張つて良い人になろうよ」。子供は真剣な態度で、優しく大人に話しかけ、笑つて、もう怒らないでと言うのです。

この映画のストーリーは世界の注目を集め、子供の言った幼い言葉ですが智

慧に満ちています。

凡夫には各々の考えと習性があつて、悪念が起きると心は猛獣のようになって、世間に災難を多発させます。仏陀には十の尊称があり、その一つに「調御丈夫（じょうごじやうぶ）」があります。仏に学ぶ者は常に己を観察し、己を調和できているか、つまり内心は猛獣になつていないか、悪癖は調伏できるかと自問するのです。善根を培い堅い信の力があれば、どんな習気も治すことができます。

信心の樹根は深くしつかりと土の中にあれば、試練に耐えることができます、

強風が吹いても倒れません。常に「聞、思、修」を心がけ、法を深く心に聴き、細心に思惟し身を以て努め励めれば何事にも通じます。そして皆が清らかな本性に戻ると社会は平安になることができます。



人生での思い通りにならないことは十中八九ありますが、遭つても恨まず、たとえ逆境であつても「逆増上縁」の試練と思つて感謝することです。過去世にどんな因を造つて、どんな縁があつたか

によつて、今生の境遇につながります。逆風がくれば甘んじて受け、智慧を使つて悪縁を善縁に化すことです。

農夫が種まきをするように、季節という因縁を把握して、一心に耕せば豊作になります。清らかな本性とは正因のことで、深い修行の善縁があると因は熟成することができず。単純な心を以て今すぐに人と良い縁を造り、良いことは機会を逃さず、未来のために福因を造りましょう。

反対に逆境に遭つて無明が起きると、人とのいざこざに纏わりつかれて、さらに多くの業を複製します。間違いにさら

に間違いを重ねると、業に業が加わつて苦しい人生になります。

ですからわずかな悪念でも、察知したらただちに改めることです。その上堅い善心があればばんやりとして因縁のままに引きずられませんか。今生の方向が偏らなければ、来世には良い自分があつて業力に引つ張られず、自分の正しい方向を掌握することができます。皆さん心して精進して下さい。



【清貧から豊かさを得る】

◎文・證嚴法師／訳・慈願

その八・住―心広ければ住まいも広い

現代の社会はおしなべて豊富な衣食に恵まれています。お金さえあれば、享受するべきだと言う人々がいます。しかしながら、大きな邸宅を豪華に飾りつけても満足しない人は本当に心が楽しいでしょうか？ そんなに豪華な住居が必要なのでしょうか？

私は常に幅三尺に長さ六尺のベッドさえあれば、気持ちよく眠れると思っています。住まいは清潔で、風雨を凌げたらそれでいいのです。適当な

食事、睡眠と温かい衣服は生活の根本で、それ以外の物質は生活する上で
の道具にすぎません。

私たちは家を整理することを学び、物が充分にある時は大事に使い、足りない時は気にかけず怨まないことです。

人生で多くの財宝を持つていても楽しいとは限らず、真の豊かさは心の中にあるもので、心の内で満足していなければ豊か
とは言えません。住宅の大きさ、快適さを求めるよりも寛大な心と自在を求めることです。心機一転すれば、自然に人のために金銭を使うことは困難でなく、いつも人との善縁、福縁を積み重ねることで円満な人生が送れます。





「広い住まいより広い心を」

天と地の間に生を受けている私たちには、住という小さな空間が必要で
す。しかし、豪華でなく広くなく、いかにして、物欲を縮小して広々とし
た無形の念を広げることができでしょうか。

私は「広い住いよりも広い心」ということをいつも言っています。生活
する上で適当にあればいいのです。何も余計なものを求めず、大切なのは
満足することです。貧と富の差は金銭の多寡、地位の高低、権力の大小に
なく、心で満足していることです。

新店に九十歳になる退役軍人がいます。欲少なく楽天的な一人暮らしの

お年寄りには、近所の人と仲が良く皆に
好かれています。貧しい家は雨漏りす
るので室内はじめじめと湿って、毛布
はかびていました。水がめに貯めた雨
水を使い、近くの枯れ枝を拾って三度
の食事を作っていました。

慈済ボランティアが訪問した時、こ
の様子を見るに忍びず家の修繕をす
ることにしました。しかし、あまりに
もぼろぼろで修繕だけではすまされ
ず、取り壊して立て直すことにしまし





た。お年寄りは大変感激しましたが、土地の所有者は隣の人です。慈済人が建直すと聞いて隣人はすぐに「構いません、私の土地ですが家を建直してもいいですよ」と。

新しい家が出来上がった時、こんな家に住めるとは想像もしてなかった、それに底まであるからそこで近所の人と楽しく話ができると満足そうにお礼を言いました。

もう一人の中風のお年寄りは、若い時に知的障害者の娘と結婚していました。今、妻は下の世話をするこさえできず、排泄物は家の裏に捨てて屋内は見るに耐えない程汚れていました。

慈済人が貧民支援に行った時、この地域のボランティアにも呼びかけ

て、家の内外を清掃した後、お年寄りの体を洗って清潔な衣服に着替えさせました。その実、お年寄りは一軒の家を持っている上に、月々の退役軍人の手当で経済面では問題がありません。ただ悪い娘がいつもお金をせびりに帰ったり、騙したりしていました。そのためか、お年寄りはお金にひどく執着し、毎月給付される手当のお金も使い惜しみます。

頑なお年寄りは慈済人に対して依頼心が強く、もつと多くの援助を望みます。ボランティアは金銭上の援助はしていませんが、気にかけて度々様子を訪問に訪れます。訪問の度に喜ぶけれど、不平を訴え何が足りない、何が必要と要求します。行くたびに聞く不平で、毎日の生活がどんなに辛く楽しくないかよく分かります。

人生で豊かな心は最も重要なことです。もしも、物欲のとりこになつ



ていたら、どんなに多くを持っていても足りないと感じ、心は貧しいものです。反対に物質面では清貧であっても、心はそれに影響を受けていなければ心豊かな人生です。一人一人が豪邸を持っているとは限りません。しかし、美しい広々とした心の邸宅を持つことができます。

一九九九年九月二十一日に発生



した台湾中部大地震の後、私に会いにきた普通の格好をした子供連れの若い夫婦に感動させられました。夫婦は小さな二階の借家に住んでいて、家と車を買うために一心に働いて貯めたお金を持って家を見に行っていた矢先、大地震が発生しました。夫婦はそのお金を献金したいと言うのです。慈善人は一時に全部を献金せずに生活のために残すように勧めました。

夫婦は「今の二階の借家に住んでも別に構いません。私たち一家は幸せで何の憂いもなく暮らしています」と。これが「住居の広さよりも心の広さ」ということです。地震の被災者が瞬時にして家族も家も失ったことを、夫婦はしみじみとその身に感じたのです。中でも希望工程（被災した学校の再建プロジェクト）には多額の献金が必要です。夫婦は家を買うには、またお金を貯めればいいので、人助けは機会を逃さずという思



いで献金しました。その上、このことはメディアのインタビューを受けずに安心して善事を行いたいと言いました。

いかにして「広い心」を持つことができるのでしょうか？ 誰もが善に解釈し、人と人が睦まじく触れあうことができれば幸せです。何時も寛大な心を持って人を包容すること、そして、足るを知り、お互いに感謝の心を持てるようなら「難」はありません。

以前の人の心は単純でしたが、社会の経済発展にしたがって欲念は膨れ上がり感謝の心が薄れています。人性の単純な善念が次第に薄れていくことは、実に心配です。どうしたら善良な心が啓発できるのでしょうか？ それは、内心からの愛を發しその愛の種子を散布することです。見返りを

求めない奉仕ができ、受けた恩を感じて、それに報いれば社会に希望が現れます。

「あなたにこんなことができる」

地域の改造に参加

一人の力に比べて大勢の力は更にエネルギーを節約し、生活環境を改善できる。地域活動に参加して、地域の緑化と省エネを隣近所に呼びかけ、ともに実行すること。

知識を応用できるのは とてもよい 呉三江

◎文・張晶玫／訳・金華

医者となって三十年、患者から「お医者さん、あなたは思いやりのあるいい人」と言われると、呉三江は顔をほころばせ、人を救う医者を志した若い時の思い出がよみがえる。



壁からにじみ出る涼しさに気づいた若い呉三江は椅子から立ち上がり、視線を目の前の厚い本からそらした。机にかじりついて本を読んでもう何時間になるか記憶にない。

呉三江はかつて軍に属する高雄総合病院で四年間、入院患者の診察と治療を受け持つ医師になるための訓練を受けた。そのうち三年目は、金門の「花崗石」病院へ支援に派遣された。太武山の麓に位置するその現代的な病院は軍が山の花崗岩を掘った坑道内に造った。坑道の全長は一千八百メートル。彼は毎日忙しい医師の仕事を終えると夜は眠る前に坑道内の

質素な小さい部屋で静かに本を読む。部屋の壁は花崗岩を掘ってきたとは思えないほど滑らかだ。彼は退勤して部屋に戻ると医者の白衣を脱いで壁にかけ、緊張をほぐすために力強く呼吸する。そして思いを巡らす。今の自分はあたかも長い年月を経た古い石と土の匂いが空気中に漂う地下の酒蔵の中で、歳月の経つのと醸造の技術によってより良い銘酒になるのを望まれている酒のようだ。

壁の掛け時計が午前二時を指しているある晩、呉三江はゆっくり歩いて長い地下の坑道から出た。正面から吹きつける冷たい風に身震いしたので、腰を伸ばし

頭を上げて墨汁のように暗い夜空を見上げたら、光り輝く満天の星がちりばめられている。宇宙の中心に根づいたようで彼の心は星のように明るい、これからの人生で歩くべき道を彼は確かに自覚している。

毎日夜の二、三時頃まで自由に本を読み続け、翌朝の五、六時には起床する生活を送り、「努力すれば明るい未来に恵まれる」ことを信じて呉三江は仕事に精を出していた。しかし四方八方が静まり返った時、海を行き来する船を見ながら家が恋しくなることがしばしばある。

呉三江は一九五〇年代に裕福ではない

収入を得るのが目的のではなく、医師の優れた医師になろうと望んでいるからだ。

医師と患者の間柄から友達へ

呉三江は自分の思うことをやり遂げようと日夜を問わずに奮発した。その努力が報われ、住院医師（入院患者の世話をする医者）になって二年目、医学季刊に研究論文を発表した。その後順調に主治医師に昇格し、腎臓の病気を治療する分野の専門医師になった。非常に早く、多くの人が彼には腎臓病を診察、治療する

家に生まれた。わずか十数坪の小さな家で全家族が暮らしていた。彼は弟と二段ベッドで寝起きし、幼い頃から全ての家事を手伝った。家計は良くないものの、生活は単純で喜びに満ちていたことを覚えていいる。両親は彼の前途のために特別な取り計らいをしたことはない。「進学するもよし。進学しないなら就職しなさい」と言われたので台南の第一高校から国防医学院に進学した。勉強は辛くないと言う。

入院患者のケアをする医師を勤めた何年かの間も、呉三江はできる限りの時間を割いて新しい知識の習得に励んだ。高

高い技術があるのに気づき、診療を受ける患者はますます多くなった。国防部管轄の病院から退役した後、彼は高雄市立の総合病院に転勤し副院長まで勤めた。

二〇〇三年に呉三江は自分でクリニックを開業した。一般からの評判は相変わらず大変いい。彼は笑みを浮かべた和やかな表情で患者に接するので、患者の緊張が解かれるのだ。さらに根気よく患者の病状についての訴えを聞いてから診断する。医者になって三十年この方患者との医療のトラブルを起こしたことはなかったばかりか、多くのかつての病人といふ友達になった。



●呉三江は医者になって30年この方患者との医療のトラブルを起こしたことがなく、多くのかつての患者という友達になった。

緊張とトラブルが多い現在の医療現場で、自分の携帯電話の番号を患者に知らせる医師は大変まれで、呉三江はその少ない中の一人である。それで深夜に患者もしくは家族から慌ただしい口調で「病状が急変し不安でたまらない」との連絡を受けたり、あるいは救急センターから助けを求める電話を受け取る時もある。そんな場合彼は詳しくかつ最も分かりやすい言葉で説明する。その電話で自分の

生活が邪魔されるのを気にしない。なぜなら彼もかつては病人の家族だったからだ。母親が肺がんを患った時、彼は正確に物事を判断できないほどに心配で怖れを感じた。

仕事に余暇があると呉三江はゴルフを楽しんだ。だが時間があったいと思いい、テニスに換えた。しかし間もなく運動障害のために放棄せざるを得なかった。月日が経つのは早いもので、彼は小さい子供の頃の何の悩みもない楽しい毎日と、若かりし日の努力すれば報われるとの信念で送っていた単純な生活を思い出し、今の状況を考えた。「自分の生き方は

このままでいいのか?」「私は有名になったが、どうして空しい思いがするのか?」と疑問がいつも真夜中の静かな時に頭に浮かんで離れない。

往診の時に 心がけるべき大事なこと

「私は何のために医者になったのか?」と呉三江は常に自問する。もちろんその答えは当初医師を志した時の発願と変わらない。「病気を治療して病人の苦痛を和らげる」のだと。その使命の尊さを噛みしめていると急に金門にいた時に見た夜

空に輝く星が記憶によりみがえった。ちょうどその時薬剤師の郭東が彼に聞いた。

「呉院長、慈済人医会に参加しませんか？」と。

彼は普段から郭東が親切に病人に接している態度に感心しているので、ためらわずに彼女に「いいよ」と答えた。

慈済人医会の人たちが辺鄙な山里へ入って診療奉仕する場合は呉三江は毎回快く参加した。狭い山道を辿って一戸ずつ訪れ、お年寄りや長年行動の不自由な病人を見舞ったり診察したりする。山奥は診療の資源が少ない上に、自身の健康の具合をきちんと話せる人は稀にしか

い。しかし彼は長年の経験を活かし、簡単な質問と聴診器を使った観察で、すぐにその病人の具合の悪いところを正確に診断する。

高雄市桃源区高中村への往診で、呉三江はあるお年寄りの家に入りました。

「おじいさん、どこの具合が悪い？」と聞いた。

お年寄りは口をもぐもぐして答えたが、何を言ったか誰も聞き取れない。一、三人の看護師がそのお年寄りの具合をもっと知ろうと試みている間、彼は聴診器でお年寄りの心臓の鼓動を聞いたり、背中をさすったり、手を触ったり、膝小僧を

軽く叩いたり、さらにお年寄りの服用している薬の包を詳しく見た後に、「おじいさん、あなたの尿酸は比較的に高い。痛風もある。腎臓が悪くなっているよ」と告げた。それを聞いたお年寄りは分かるように、分からないようでもあった。さら

にお年寄りの部屋を見回したら、寝床の下に成分と製造元が不明のサプリの空き瓶がたくさん転がっているのを見て、彼は根気よく詳細に薬を正しく使う観念をお年寄りに教えた。

このような往診は時間がかかる。ひと朝に診れる病人はせいぜい四名が限界である。診療奉仕に参加した優秀な医者に

診てもらおう病人を多く集められなかったのは失策であり、また医療資源の浪費でもある。慈済ボランティアたちは呉三江に大変済まないと思っている。しかし彼自身は気にしていない。微笑みながら皆に言った。「私に学んだことを応用するチャンスをくれてありがとう」と。

慈済人医会の診療奉仕に参加するたびに、呉三江は詳細に「タバコを吸わない、酒を飲まない、ビンローを食べない」基本衛生常識を診療する相手に教える。集落の十名の中一人が聞き入れれば「進歩」、二人いれば「感謝」するべき、三人が聞いてくれるなら往診は「成功」だと

彼は言う。

思いもよらない成り行き

診療奉仕を何とも思わない人に出会う場合がある。そんな時、熱心に奉仕する意気込みが伝わらないと思つて気が抜ける。しかし多くの患者が診察前のしかめっ面から診察後は笑顔にかわり、さらに「お医者さん、貴方は大変いい人です」と言うのを聞くと、呉三江は若い時に抱いた人を助けるという大きな志がよみがえる。さらに患者の感謝を込めた熱意ある握手を求められると人情の温かみを感じ

ないわけにいかない。

こんな時、呉三江はかつて出会った一人の病人を思い出す。心臓の手術を受けたあと腎臓の透析をしている病人で症状は安定していた。しかし思いもよらず十六年後に膀胱がんに罹った。最良の治療を受けさせて、膀胱がんが治ったと思つたら、腎臓がんに見舞われた。その病人が死神と厳しい戦いをしている間、彼はいつも見守っていた。病人が腎臓がんが続いて肝臓がんを罹ったあと、その病人の心臓の持病が悪化して再度の手術を強いられた。彼は病人に言った。「三回もがんに襲われたが君はそれを一つ一つ克

服した。今回の手術も君は無事に乗り越えられる」と。執刀医と病人それから彼も自信と希望に満ちていたにもかかわらず、その手術は失敗し病人は他界した。何日か後その死者の家族が彼に電話で長い間の治療に感謝した。この電話で彼は人生の無常と生命の尊さをしみじみ感じ、何事も時間を把握して取りかかることが大事と改めて悟った。

病人に最も良いこと

腎臓内科の医師ではあるが、呉三江は自分を家庭医と位置づけている。彼のク

リニックには面白い現象が見られる。一般のクリニックでは病人は薬をもらったらずぐに家に帰るのが普通であるが、彼は病人をしばらく残して、看護師や薬剤師が担当して一人一人に正確な薬の飲み方と飲食で注意すべきことを教える。

場合によつては病人にとつて最もいいのは、医者 of 優れた医術ではない。病気を治す薬でもない。病気を癒すのに大変役立つのは、病人の訴えを根気よく聞くことである。病人に存分な時間を与え、その言うことに耳を傾ければ、意外にも診察で言ったことと違うことを言うことがある。ある老婦人ははじめふくらはぎの

むくみに苦しんでいた。しかし、あとで分かったのは膝関節の退化による痛みであったことである。別の中年男性は血糖値が思うようにコントロールできないのに悩み、薬を変えて欲しいと訴えた。詳細に聞いて判明したのは薬の問題ではなく、健康にいいとすることで果物をたくさん食べ過ぎたために糖分を摂り過ぎたのだった。

昨年の六月、呉三江は慈済人医会の医療ボランティアと一緒に高雄市塩埕区のトタン屋根の慈済環境保全ステーションに出向いて、資源回収に勤しむボランティアの健康検査と衛生教育をした。ステ

ーションの中は狭く混んでいるので蒸し暑いが、親切な応対で誰も気にしない。ボランティアは年配者がほとんどなので足腰の不具合も多い。雨の日も風の日も休まないボランティアに「休みなさい」と言っても無駄であると分かっている彼は、自ら「アヒルの歩き方」を示範して、皆に関節の鍛錬とケアの方法を教えた。

そのあとに続いて呉三江は環境保全ボランティアたちに腎臓の病気の予防について分かりやすく説明した。「腎臓は環境保全ボランティアと同じように役に立つ物を残す役割を果たします……」と始めた。トタン屋根の下は蒸し暑いが、ボラ

ンティアたちはみな真面目に彼の演説に耳を傾けた。

雷がゴロゴロ鳴って雨がついに降りだし、道行く人はそれぞれに雨宿りする場所を探した。天気もやや涼しくなった。部屋一杯のボランティアと片隅で忙しく立ち働く慈済人医会のメンバーを見て、呉三江はしばらくの間頭に蘇ったのは例の古い石と土の匂いとする地下坑道の病院にいた時の思い出だった。

にわか雨はやがて止んだ。ステーションの外に植えてある木は、太陽の光に照らされて輝いている。呉三江が地下の坑道から出て夜空を見上げた時の星の輝き

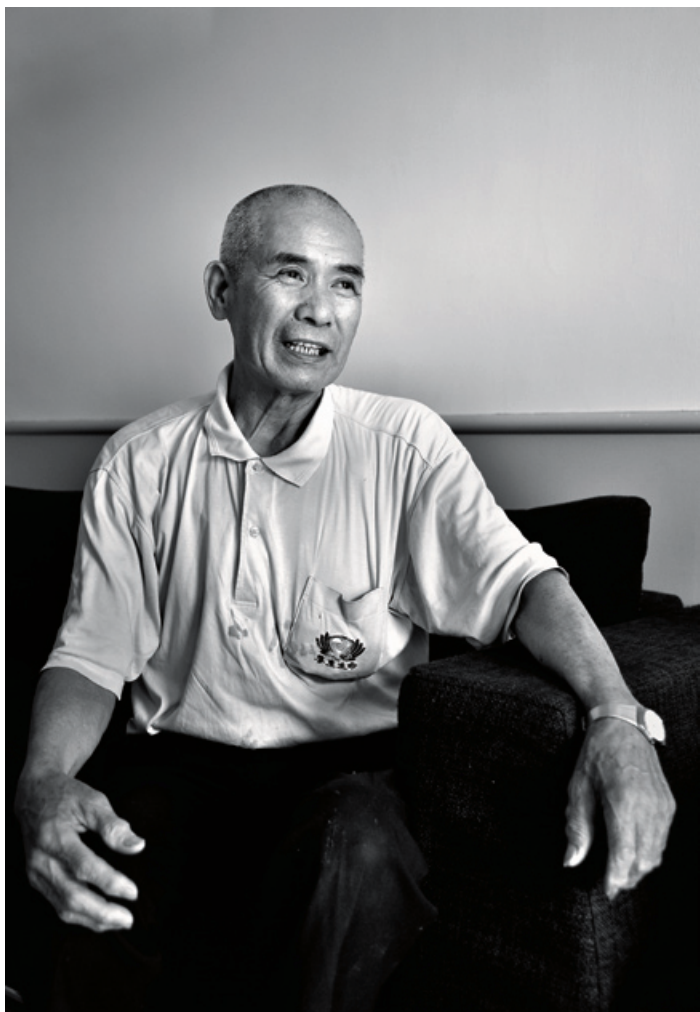
そっくりだ。今の彼の心は若い時と同じようにやる気に満ちている。そのほかに若い時には持っていない帰属意識を持つようになった。医師の道を歩く志を持った同士を慈済人医会に見つけたのである。彼は笑いながら言う。「歳を取るほど楽しい」と。彼の医者としての人生は、あたかも年代物のお酒のように、年月の経つに連れて香りもますます濃くなっている。

（慈済月刊五八五期より）

ここまで歩んできました

◆ 台北・陳阿池

陳阿池さん、通称池さんは今年で七十八歳を迎えます。宜蘭に生まれ、結婚後は家族に安定した生活をさせようと、単身台北に出て働いていました。線路の補修工事や運送業、タクシートの運転手などの仕事を転々とした後、バスの運転手の免許を取得してからやっと安定した収入が得られるようになりました。



当時の池さんはお金を稼ぎたいという一心で、毎日平均十二時間働いていました。四十五歳になった時、偶然一人の慈済ボランティアと知り合ったのが縁の始まりで、證嚴法師の開示を録音したテープを聞く機会に恵まれたのです。上人の慈悲の心に感動した池さんは、運転しながらずっとテープを聞き続け、命あることの価値と意味について深く考え、善行を行うことを今ためらってはいけなさと悟りました。以来二十五年間ずっと池さんは環境保全ボランティアの仕事に取り組み、それだけでなく、上人の教えを頭と心に刻み込もうと、義理という人として正しく歩むべき道について考え、それを自分の経験として生かし、誰かと分かち合うことに喜びを覚えました。病魔の苦しみに遇った時でも教えを学びたいと強く願う気持ちは途絶えませんでした。



うしていましたが、まだ自分の働きは足りない、上人の歩みについていけないのではないか、と感じたので、仕事の時間を調整し、半日バスの運転手、あと半日は資源回収をすることにしたのです。収入は半減しましたが、池さんはそれで大きな喜びと満足を得ました。本当の喜びはお金で得られるのではなく、尽くすことで得られると悟ったからなのです。一九九七年六十歳で退職を迎えた後、ようやく念願だった専属の環境保全ボランティアとなりました。

池さんは毎日朝晩のお勤めの時に證嚴法師の「三求」を暗唱します。「三求」とは、健康を追い求めず精神の叡智を追い求める、思い通りを望まず勇氣の力で立ち向かう、責任の軽減を求めず能力の向上を望むというものです。上人の教えを学ぶことを怠ってはいけなさと自分を戒めるためです。事実、池さんはこれまで何度も病気の苦しみと戦ってきました。生死をさまようこともありましたが、数年前には癌を煩い胃を切除しました。そのため八十五キロあった頑丈な体は六十数キロにまで瘦



池さんは笑いながら話します。「自分は物覚えの悪い人間なんですよ。だから人より多く仕事をして、もつと話を聞いて、もつと勉強をしなくてはいけないんです」

ただその歩みについていきたいと願って

上人のお諭しの中の「拍手を送るその両手で環境保全をしましょう」という一言を聞いたときから、池さんは仕事の合間を縫って資源回収車を運転し、各地を回りました。しばらくはそ



池はだまって手を差し伸べてくれました。こないだいい弟はほかにいませんよ」。兄弟の深い絆を目の当たりにし、私は池さんが兄弟について語った詩の一節を思い出していました。「兄弟元々生まれは同郷、いさかい減らして争わず、お互い会う度年をとる、一緒に生きていく」

妻の林鑾蝦さんが言うには、池さんは実はとても節約家です。自分のためにお金を使えない人なのだそうです。この数十年間毎

真の幸せと喜び

せ細ってしまいました。しかし池さんは歩みを停めなかっただけでなく、さらに強い意志の力で以てボランティアの仕事を続けたのです。常に微笑みを携えてこう語りました。「病気でない限り毎日ボランティアに出かけます。親からもらったこの体は一時的な物にすぎないので、何かできるのも今のうちなんですよ」

内湖の環境保全センターでは、人々が口々に池さんに学びたいと賛辞を送ります。仕事熱心だけでなく、誰に対しても誠実で裏表がなく、人当たりもよく、思いやりの深い人だからです。ある日私たちは池さんと一緒に宜蘭の実家を訪ねました。道すがら近くに住む四番目の兄の所に立寄り、一緒にお昼をいただきました。テーブルにつくと池さんはお兄さんを気遣って話しかけます。するとお兄さんは感極まって感嘆の声をあげたのです。「池は本当によくしてくれるんです。私が困っている時、



日同じボランティアの制服を着て出かけ、ボランティアに明け暮れ、どこかへ旅行に行くことなんてあり得ませんでした。それだけでなく、三食とも自分で作るそうです。食事はとても簡単なもので、ご飯一膳に野菜のスープ、これだけで満たされるのだそうです。

池さんは生活に困っているわけではなく、ただ清らかな心の持ち主なのです。貧しくても喜びのある生活をし、欲望を最小限にして、人のため善行に尽くしているのです。清貧な暮らしによって毎日が充実しているのがよくわかりました。これがすなわち證嚴法師のお諭しにあるこの言葉の意味することだと言えます。「心に念じることが素朴であれば、自然と人は争わなくなります。争いのない世の中になります。そうやってこそ貴方も安らかに自在でいられるのです」



寛仁な心で誠実に

心を広げれば人を済度することができ
る、物事に信実を以て対応すればやり遂
げることができるのです。

世の中を心して見よう

「インターネットによってありとあら
ゆる情報が手に入ると思っている人はた
くさんいます。ただし、物事の表面を見
るだけでは、智慧を働かせて道理を深く

◎文・釋徳仇／訳・心嬖

理解することができません。知識については豊富なようですが、
智慧微弱の現象が実に心配でなりません」と上人はおっしゃいま
した。

朝会の時間に、上人は、「物事を明瞭にしないままに欲念に駆
られ、またその波にのまれて流されている人も少なくないよう
です。昔の人々は農業をしながら簡単に質素な生活をしていま
した。素朴な人柄で倫理道徳をしっかりと守り、長幼の序があり、お
互いに礼儀正しく人情溢れる社会でした。現代社会では、科学技
術の発達につれて、情報の伝達が迅速になりました。若い世代は
知識や情報などが容易に入手できますが、科学技術をめぐる道徳
や社会にもたらす倫理的な問題が無視されがちのようです」と指
摘なさいました。

慈済青年部幹部養成キャンプ会場で、国内外からの約二百人を
前に、そしてテレビ会議により花蓮及び台南の慈済中学校の教師



と生徒たちに、上人は話されました。「若い人の心は、パソコンやインターネットの『網』にとらわれて無明の網にからまれています。それは心が深く苦しい状態に陥るだけでなく、家庭や社会の平穩にも影響がでるのです」

「人間は生まれてからすぐ環境に負担をかけています。環境悪化の原因について、じっくり考えみると、それは現代人の暮らしが贅沢になりすぎて大地に度を越した破壊を及ぼし、それが環境を汚染してしまったことは言うまでもありません。ですから地水火風といった四大不調和の現象が生じたのです」

『大地を護り資源を大切に』と子供に導き教えるべきです。人間は必ずしも海外へ出て自分の視野や見聞を広めればよいわけではありません。日ごろ心して人や物事に対応した場合に、その接した人、事、物の中をさがし求めれば智慧が得られます」と上人は期待されています。

心を一つにすればやり遂げることができる

大陸蘇州の慈済ボランティアとの談話において、上人は、「人と接するには寛容さをもちたいものです。心を広く開ければ、人を済度したり、引率したりすることができます。組織の構成がしつかりしていることよりも、団体に属する同志が心を一つにすることの方がもっと大事です。お互いに尊重し合って心を一つにすれば何事もやり遂げられるのです」とお諭しになりました。

慈済の道場はより多くの衆生を迎えるため常に開いています。人が多く集まればなすきことも増え、もちろん物事に対する見解も複雑になります。ボランティアを引率することは容易ではありませんが、無理矢理に人を動かしてはなりません。

「ボランティアというのは、自発的で人のために熱い思いを込めて喜んで実践することなのです。無理矢理に押し通してはいけ



ません。人に不快な気持ちをつのらせると仲間の中に悶着が生じやすいのです」

「人が楽しくて、心地よくボランティアの活動に引き込まれるキーワードとは、『誠』です」。上人は、環境保全のボランティアを例にしました。環境保全の重要性を彼らに確実に認識してもらい、そして「責任や使命感」という思いを働かせながら全力投入ができるのです。いくら苦勞しても甘んじて心の中に意義のあることを実感したに違いありません。

「慈悲喜捨の思いを基として広い愛の心を持ち、地元で熱心な心のあるボランティアたちを引導しながら慈善の基礎を深く固めるよう努めましょう。そして喜んで奉仕に尽くし、甘んじて受け止めましょう」と上人はみなを励まされました。

（慈濟月刊五八五期より）

慈濟大事記十月

訳・済運

10・02

ブルネイ・セリア中学校の教師と生徒が初めて慈濟ブルネイ支部にある環境保全教育ステーションを訪れた。慈濟ボランティアは静思人文及び大愛感恩科技会社の製品を使って環境保全活動の仕方を説明した。そして、59人全員に回収した資源の分類を体験してもらうことで、正しい

10・06	10・05	ロン公園で清掃活動を催し、54人のボランティアが参加して緑化や除草作業を行った。慈済は2008年から春と秋に同活動を行ってきた。 グアテマラの首都グアテマラ市南部のエルカンブライ村で1日、大規模な土砂災害が起き、死者は100人以上、行方不明者は約300人に上った。慈済ボランティアは5日、調査に出かけると共に、200人分の炊き出しと果物をサンカタリーナピヌラ市政府の災害支援物資集結センターで配付した。 ◎慈済大学はフィリピンのカトリック・テラサ健康科学大学と交流協定を結び、王本榮学長とオーガスティン修道士が代表で調印した。将来、両校は教師や学生の交換で協力し合い、医学研究を推進する。
-------	-------	---

10・04	10・03	環境保全の理念を理解してもらった。 ◎慈済基金会は屏東県政府から依頼を受け、新来義村の第3期22戸の恒久住宅の建設を引き受けることになった。2010年の台風11号被害に対処したもので、本日入居式典が行われた。 ◎慈済ニュージーランド支部でオタラ地区とパパートエトエ地区の貧困家庭88世帯に対する食糧パックの支給と施療が行われた。 ◎慈済インドネシア支部の郭再源副執行長は50名の実業家とその家族を伴って3日、台北慈済病院を訪れ、医療部門及び人文方面に関する経験と知識を学んだ。インドネシア慈済病院の建設に役立つことだろう。 慈済ウエストトロント支部はオンタリオ湖畔のブルクナー・ロードデンド
-------	-------	--

10・17	10・16	
トルコ慈済ボランティアと慈済シリア難民支援団は17日、マナハイ小中学校で学用品を配付した。18日と19日にはサルタンガジ市で2388世帯を対象に配付活動が行われ、同時にマナハイ小中学校、第2学校の152人の生徒に日用品を配付した。	慈済のシリア難民支援団23人がボランティアである黄秋良を団長に台湾からトルコへ出発した。今回は主に現地ボランティアと共に配付活動を行うもので、マナハイ小中学校で学用品や玩具を配付し、23日に帰国する。	8日と9日に病院とホテルへ見舞いに行き、炊き出しや日用品を配付し、また通訳と送迎を行った。

10・08	10・07	
マレーシア・ジョホール州で中国人観光客を乗せた観光バスがバトゥパハ区からヨンペン区にかけての高速道路でタンクローリーと衝突し、死者5人と負傷者15人の惨事となった。バトゥパハ慈済ボランティアは	苗栗県ゾラン町のゾラン小学校の校舎は老朽化したため、取り壊して再建することになった。その期間、校舎が使用できないため、慈済基金会在臨時教室の支援建設を引き受け、当日起用式典が行われた。	◎5日から7日の3日間、大愛感恩科技公司は「2015年紡績鏈国際討論会と研究発表展示会(TIFE2015)」に参加した。6日は研究開発部門の洪碩廷博士らが「イノベーションと価値」と題した講演と意見交流会に参加し、業界のイノベーションと永続的な発展を期した。

慈濟

2015 年 11 月 17 日 発行・227 号

中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄

Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴
発行所 慈濟基金会
〒112 台湾台北市北投区立德路2号
編集 慈濟日本語翻訳チーム
杜張瑤珍・張涵
校閲 山田智美
電話 (886)02-2898-9000
FAX (886)02-2898-9920
E-mail: 019874@tzuchi.org.tw

慈濟基金会日本支部
〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16
電話 (03)3203-5651 ~ 5653
FAX (03)3203-5674
E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw
tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈濟に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本文への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただけますれば幸いに存じます。(日文組編集同人)

師匠、株で大儲けして慈済に寄付したいのです。

お金は生まれた時に持って来るのでもなく、死ぬ時に持って行けるわけでもありません。分相応のことをするのが一番良く、お金はある分だけ寄付したらいいのです。株式相場の上下につられて一喜一憂してはいけません。もし、私が貴方に株の投資をやめなさいと言った場合、株が下がった時、貴方は師匠が助けてくれたと感謝するだろうし、株が上がった時は儲け損なったと師匠を恨むでしょう。貴方の情緒が毎日株価と共に上下してい

たら、どうやって智慧が生まれるでしょう。それに、どこに他のことをする気力がどこにあると言うのですか。そういうお金をさっぱり忘れて初めて心は清らかになります。



絵・蔡志忠／彩色・慮扶
訳・済運《清らかな智慧》より